

■キーノートセッション

SDGs 達成の先に何を見るかー未来の幸福をデザインする社会の共創

日 時：11/9（金）14:45-16:15

会 場：日本科学未来館 7階 未来館ホール

出展者：科学技術振興機構

キーノートセッションでは、SDGs達成の先にどのような社会を見るか、未来の世代に渡す人類の本当の幸福とはどのようなものかに立ち返りながら、これからの研究開発や産業が提供していく価値、進むべき方向、登るべきステップを探りました。

登壇者

〈パネリスト〉

小松 太郎 (上智大学総合人間科学部教授、グローバル教育センター長)

國枝 秀世 (JST 上席フェロー)

深堀 昂 (ANA ホールディングス株式会社 デジタル・デザイン・ラボ アバター・プログラム・ディレクター)

Kay Firth-Butterfield (世界経済フォーラム AI・機械学習プロジェクト長)

Hank Kune (Founding Partner of the Future Center Alliance (FCA))

Martha Russell (Executive Director of mediaX at Stanford University and Senior Research Scholar at the H-STAR Institute)

Michiel Kolman (Senior Vice President-Information Industry Relations and President International Publishers Association Diversity and Inclusion in the publishing at Elsevier)

〈ファシリテーター〉

駒井 章治 (奈良先端科学技術大学院大学 バイオサイエンス研究科 准教授)



●主なメッセージ

- ◆世界には多様な価値観、課題が存在する。同じテクノロジーでも本当にアクセラを踏むだけでよいのか、我々が求めている幸福はどのようなもので、それを解決する形でテクノロジーが使われているのかということを考えたい。(駒井章治さん)
- ◆SDGs達成といったときに、我々が持続したいと思う社会的・倫理的側面にもっと焦点を当てていきたい。武力衝突が起きる地域では、その前に不正があった場合が多い。旧ユーゴスラビアで民族対立を煽った政治家やそれを支持した人々は高学歴者だった。SDGsを実現していく上でSTEMと社会科学・人文の融合を目指した教育がこれから求められる。キーワードは社会的公正と次世代に対する責任。(小松太郎さん)
- ◆スタンフォード大学のメディアXは産学官の対話を行うインターフェース。約30の研究所のバーチャルネットワークとなっている。どのように技術を使うのか、私たちの生活にどのようなインパクトをもたらすのかという議論は時間がかかる。鍵となるのは「対話を継続すること」。ジャズの演奏のように、メロディやキーを決めて、それぞれ他者の演奏を聴きながら交互に演奏する、それを積み上げるような会話は非常に生産性がある。(SDGsに貢献する技術について)技術にフォーカスしすぎず、コミュニティにフォーカスすべきだ。人間が独自性を尊敬しながらともにコミュニティをつくる、そこに技術が使われるならばよいが、技術が全てのギャップを埋めてくれるわけではない。思慮深く、将来への責任を持つ必要がある。(Martha Russellさん)
- ◆JSTの未来社会創造事業は、10~20年先を見越して未来社会で想定される課題を革新的技術により解決することを目指している。「未来に想定される課題の解決」には科学技術はもちろんだが、社会改革も必要となる。また課題は見通しがつくが、夢を創造することが難しい。社会との対話によりいいものを取り込んで、議論が議論で終わらないよう実現につないでいきたい。(國枝秀世さん)
- ◆私たちは『解決できない社会問題はない』という強い信念を持っている。『解決できる能力を持った人』が『適切な時』に『適切な場所』にいないことが問題であり、それを実現できればグローバルアジェンダもSDGsも加速できると信じている。(深堀 昂さん)
- ◆SDGsは普遍的行動を求めているが、これには『共創』が必要で単独では達成できない。科学出版社であるエルゼビアはこれまで質の高い情報発信を通じて『読む』こと、『探す』ことを支援してきたが、これを『やる』ことの支援にまで推し進めたい。例えば医師が手術をするときに正しい情報を伝え、手術の要否を判断することなど。(Michiel Kolmanさん)
- ◆2050年の世界は『ニューコモンズ』の時代になっていると思う。個人・組織・社会いずれにおいても強靱性(レジリエンス)が重要になる。危機から回復する力、チャンスに向かっていける力が求められる。欧州委員会の共同研究センター(JRC)でも、複数のプロジェクトを行っているが、国境を超えた協力、イノベーションエコシステム、個人に力を与えて市民主導のイノベーションを推進すること、子供たちのいうことを聞くことも重要である。(Hank Kuneさん)
- ◆AIは全ての問題を解決する魔法の杖ではない。ハリーポッターが何年もかかって魔法の杖の使い方を学んだように、私たちはAIを活用するためのロードマップ、基盤を作らなくてはいけない。世界経済フォーラムではまさにそれを行おうとしている。重要なことはAIのガバナンスの中に、倫理、インクルージョン、ヒューマンセントリックデザインの3つを含めることだ。政府は何をしたいのかを考えること、またAIの研究者がAIの社会的インパクトも理解するようトレーニングしていくことも必要だ。AIを教育で使う際にも、子供達のプライバシーや、何を学んでいくのか、どんなデバイスを使うのかといったことを考え、基盤を作ることが必要だ。(Kay Firth-Butterfieldさん)
- ◆『SDGsのその先』に現時点で明確な解があるわけではないが、皆さんを刺激することはできたと思う。ある国際会議で『Enlightenment2.0(啓蒙2.0)』を議論したが、そこではロジックを積み上げていくことも大事だが、ロジックに意味や価値を与えるエモーションやパッションの部分を大事に考えていきたいという話が出た。本日の議論に通じる点だと思う。(駒井章治さん)

